45
2016.SUMMER

学報

挑戦。スポーツが時代を動かす

NITTAIDAI

スポーツを基軸とした世界平和、体育・スポーツの振興に新たな決意を示した創立125周年記念式典

学報 NITTAIDAI 45号 2016. SUMMER

学報 NITTAIDAI

オール日体大の力をひとつに

▷創立125周年記念式典には、卒業生・関係者をはじめ多くの方々にお集まりいただいた。本学の伝統と精神を再認識し、絆を深める催しとなったと考える。そして忘れてはならないのは、いま本学で学ぶ在学生一人ひとりも、この節目を共に迎えたオール日体大の一員であることである。言うまでもなく、今回の催しは単に歴史を懐古するだけのものではない。

▷いま、国際社会や経済の情勢は目まぐるしく変わり、国内は少子高齢化社会にまっしぐらに進む。本学も未来を担う学生も、こうした課題に対して一層の貢献が求められる。

▷このたび、第1回「功労スポーツマスター」が表彰された。活躍する諸先輩は、いわば人生のお手本である。優れた実績から学び、社会や自分の将来の問題に当事者意識を持って取り組んでいくことが、オール日体大の一人ひとりの使命である。

学報NITTAIDAI（ニッタイダイ）45号
発行日●2016年7月15日
発行●日本体育大学広報委員会
TEL 03-5706-0948
FAX 03-5706-0922
http://www.nittai.ac.jp/
制作協力●（株）図書出版

Special Contents

03 日体大の誇り、使命をあらためて心に刻み、新しい時代へ
日本体育大学 創立125周年記念式典・祝賀会が挙行される
◎記念式典・祝賀会報告／記念事業「川柳」「作文」入賞者発表
◎第1回「功労スポーツマスター」表彰

07 **活躍するOB・OG**
続けているからこそ、叶う夢、見えてくることがある。
もっと上を目指したい。プロになりたいという思いが日体大で確かになった。
寺田 洋介氏 SC相模原／SC相模原ジュニアユースU-14監督

親友が背中を押してくれて、日体大へ。そして、女性警察官に。
スポーツの喜び、辛さを知っているからこそ、地域の方々の気持ちがわかる。
小椋 佳代子氏 鳥取県警察 米子警察署 生活安全課

11 **保健医療学部からのメッセージ**
～ますます期待が高まる救急救命士を育成～
『海外研修で、災害現場で活躍する救急医療学科の活動を教えて!』
保健医療学部 救急医療学科 小川理郎教授

13 NASSの挑戦
自己管理能力の高い選手を育てる心理サポート

15 新たな知・技・心との出会い
平成28年度 新採用教員紹介

19 **news&topics**
◉平成27年度卒業記念と体操競技アベック優勝を祝し植樹式を挙行いたしました
◉平成28年度入学式を挙行いたしました
◉柔道 阿部一二三が全日本選抜柔道体重別選手権優勝
◉モンゴル文化教育大学との交流協定を締結しました
◉本学の「地方自治体への体育・スポーツ振興支援」が日本ギフト大賞2016地域ハーモニー賞受賞
◉JICA短期ボランティア合同帰国報告会を開催しました
◉野球部 首都大学野球春季リーグ戦 優勝
◉スキー部 青野令が理事長、学長報告を行いました
◉JICAボランティア平成28年度第一次隊派遣前訓練修了式に松浪健四郎理事長ほか本学関係者が出席致しました
◉125周年記念国際フォーラムを開催しました

昭和初期、水神下寮生の様子（日本体育会体操学校）

昭和39年（1955年）に設立された第1学生寮。
現在は深沢寮に名称変更。

Nittai Story

学生寮

寝食をともにした密な人間関係の中で、日体生は学生寮を舞台に様々な思い出を育んできた。

本学の学生寮の歴史は、日本体育会体操学校時代に始まる。明治37（1904）年に日本体育会体操学校が東京府荏原郡大井村（現在の品川区）に移転。いまは想像できないが、当時は通学の難しい郊外であり、宿泊施設を用意しなければならなかった。これによって体操学校の学生寮（収容人員100名程度の木造二階建の寄宿寮）が同校キャンパス内に建設された。この寮は当初は宿泊施設として運営されていたが、明治39（1906）年からは寮生活を教育の場とみなすようになり、新入生の入寮が義務付けられる。

その活動は、文芸・運動・音楽の三部の活動と、入寮式に始まり潮干狩等の親睦行事、秋の寮友会大会、卒業生の送別会等の寮全体の活動があり、非常に活発であったという。体育研究会（後の学友会）と並んで体操学校における課外教育の中心に位置するようになっていった。

現在の形となったのは、昭和12（1937）年に日本体育会体操学校が世田谷・深沢への移転に着手、同年に木造二階建の寄宿寮を深沢に落成させたことがその原点と言えるだろう。さらに、横浜・健志台では昭和52（1977）年に学生寮、翌昭和53（1978）年には合宿寮が完成。ちなみにこの合宿寮は運動部の管理・運営による「合宿所」とは異なる。学生寮は長い間、日本体育会の管轄下に置かれてきたが、教育寮としての性格を強めることを狙いに、昭和56（1981）年から大学が管轄するようになった。現在は、教育寮としての深沢寮・和泉寮、合宿寮としての健志台合宿寮・桜寮（女子）を擁する。

大正15（1926）年、平井　一氏により学生寮で「エッサッサ」が考案されたことは有名なエピソードだが、その話は別の機会に譲りたい。

めて心に刻み、新しい時代へ

～日本体育大学　創立125周年記念式典・祝賀会が挙行される～

本学の源流である日本体育会が、1891（明治24）年に設立され、今年で125周年を迎える。
これを祝して、東京・世田谷キャンパスにおいて、6月18日に創立125周年記念式典・祝賀会が挙行された。
オール日体大で、伝統と果たすべき使命の重みをあらためて心に刻む契機となった

当日は、梅雨の季節にも関わらず、好天に恵まれ、会場となったアリーナには、多数の卒業生、関係者が集まり、式典が始まる前から熱気に包まれた。

今村裕常務理事の開会の辞のあと、日本体育大学柏高校の吹奏楽部の演奏による国歌斉唱とともに式典は厳かに始まった。

まず、松浪健四郎理事長が盛大な式典が挙行されることは、光栄であると関係者の皆さまに感謝の意を表した。

式辞のなかで「8万人を超す先輩たちが、国民の体力向上、健康維持・増進、スポーツ振興のために貢献したことは誇りである。また、本学はスポーツを基軸に国際平和に寄与することがミッションであり、平和を求めるだけに留まらず、スポーツ、体育を振興して、スポーツ立国をつくるための礎になる」と高らかに宣言した。

続いて、本学名誉博士でもある来賓の森喜朗氏からは、松浪理事長の言葉を受けて、「国際平和を求めるためには、スポーツを盛んにすることが必要であり、同時に教育もしっかりやる必要がある。そこで、日本体育大学にはスポーツ教育界のなかで、栄えあるチャンピオンになってほしい」と日体大への期待を寄せられた。

本学が125周年を迎えた2016年は、リオ五輪が開催され、2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催される。その意味でも本学の役割と使命は益々大きくなって来る。来賓の東京オリンピック・パラリンピック大臣の遠藤利明氏からは「2020年の東京オリンピック・パラリンピックで新たな1ページが日本体育大学に加わるであろうと、そして、スポーツ立国の先頭に立って邁進してほしい」と話された。

さらに馳浩文部科学大臣の代理として参加された文部科学審議官前川喜平氏から馳大臣の祝辞が代読された。

式典の最後に、125周年を記念して設

日体大の誇り、使命をあらた

125周年記念事業「川柳」「作文」募集 入賞者発表

川柳・作文の募集は、記念事業の一環として、多くの人々に体育・スポーツへの興味と関心を持っていただき、これからの体育・スポーツの発展を担う子供たちに「夢」を託し、日本体育大学をより一層身近に感じていただくことを目的に実施したものです。川柳は2,629作品、作文は230作品の応募をいただき、次の方々の入賞が決まりました。たくさんのご応募ありがとうございました。

■川柳

	氏　名	所　在　地	年齢	作　品
最優秀賞	薄川　翔太	石川県志賀町（富来中学校）	14	スポーツは　世界をつなぐ　共通語
優　秀　賞	松田　清孝	静岡県浜松市	63	獅子躍り　リオに輝く　サクラ花
	松村　倫弘	大阪府豊中市	49	心技体　磨き競いて　夢拓く
	角森　みゆき	島根県安来市	22	体育が　からだを作り　ひと作る
佳　作	水野　直樹	神奈川県横須賀市	55	スポーツは　生きる力の　養成所
	高橋　和希	東京都世田谷区（日本体育大学）	19	天高く　獅子の咆哮　エッサッサ
	井上　渚	東京都大田区（日本体育大学荏原高等学校）	15	日体大　つなぐ伝統　エッサッサ
	井川　凪	静岡県浜松市（浜松日体中学校）	14	練習の　学ぶ姿勢の　大切さ
	中津川　幸哉	静岡県浜松市（浜松日体中学校）	14	大スター　薬一つで　闇の中
	齋藤　紗菜	愛知県江南市（古地野中学校）	14	スポーツは　老後を支える　命綱
	祝　優太	愛知県江南市（布袋小学校）	11	スポーツは　世界の人と　ふれ合える
	奥田　晴貴	愛知県江南市（布袋小学校）	11	靴底が　すりへる今年は　一等賞
	高橋　紗玖良	愛知県江南市（布袋北小学校）	10	仲間との　アイコンタクトの　成せるわざ
	杉本　苺優	愛知県江南市（藤里小学校）	9	アンドゥトロワ　え顔だけは　プリマ級

■作文

		学　校　名	所　在	学年	氏　名	作　品　名
小学生の部	最優秀賞	愛甲小学校	神奈川県厚木市	4	中尾　姫和	はじめて感じた気持ち
	優　秀　賞	弥冨小学校	愛知県弥富市	4	三ッ橋　美空	やったあ、すべれた上級コース
	佳　作	厚木小学校	神奈川県厚木市	5	佐々木　蒼	スポーツの素晴らしさ
		厚木小学校	神奈川県厚木市	2	佐々木　心	やきゅう
		春日新田小学校	新潟県上越市	4	西戸　航希	ゆめは、プロ野球せん手
中学生の部	最優秀賞	浜松日体中学校	静岡県浜松市	3	田邊　晴也	悔しさを乗り越えた先
	優　秀　賞	浜松日体中学校	静岡県浜松市	2	鈴木　創太	自分を作っているもの
		古地野中学校	愛知県江南市	3	冨田　幸央	「スポーツ」のすばらしさ
		古地野中学校	愛知県江南市	3	下村　奈佑	スポーツとのつながり
	佳　作	比治山女子中学校	広島県江田島市	3	半田　奈穂	スポーツが与えてくれるもの
		浜松日体中学校	静岡県浜松市	3	杉村　拓磨	本気
		古地野中学校	愛知県江南市	3	木下　睦貴	スポーツをすることのメリット
		古地野中学校	愛知県江南市	3	三輪　大祐	僕の心が引きつけられたもの
		八竜中学校	秋田県三種町	2	伊藤　邑奈	努力
高校生の部	最優秀賞	独協埼玉高等学校	埼玉県越谷市	2	富谷　野乃	絆創膏
	優　秀　賞	日体桜華高等学校	東京都東村山市	3	関口　瑠唯	スポーツの素晴らしさ
		浜松日体高等学校	静岡県浜松市	3	柳原　実和	「応援」というスポーツ
		浜松日体高等学校	静岡県浜松市	3	大橋　風香	スポーツって凄い
	佳　作	国立新居浜高等専門学校	愛媛県新居浜市	3	日野　鈴香	１コースのボレー
		日本体育大学柏高等学校	千葉県柏市	3	成沢　自由	理由
		呉市立呉高等学校	広島県呉市	3	平野　美唯菜	忘れられない一試合
		呉市立呉高等学校	広島県呉市	3	山本　翔平	野球が教えてくれたこと
		呉市立呉高等学校	広島県呉市	3	吉住　菜々子	自分自身との戦い

立された「功労スポーツマスター」の方々の表彰が行なわれた。

第１回目の受賞者は加藤廣志氏（バスケットボール）、渡辺公二氏（陸上競技）、春藤英徳氏（バレーボール）、山口良治氏（ラグビー）、山口彦則氏（体操競技）、高嶋仁（硬式野球）氏の６名である。受賞者には賞状と記念品が贈られた。

式典修了後は、場所を移して、祝賀会が行われた。厳かな式典とはうってかわって、祝賀会は終始にぎやかに、そして盛大であった。

祝賀会は「日本体育大学は、日本で最初にオリンピックと交渉を持った大学・組織であるということ、そして２０２０年のオリンピック・パラリンピックを私たちの大学で支える」という決意を表目する谷釜了正学長の挨拶に続き、獅子の会会長の乾杯の発声で始まった。

その後は、森末慎二氏と田中理恵助教の司会により各部の実演発表会が大田楽にはじまり、次々にステージ上で行われ、会場を盛り上げた。実演発表会の間に、日体体操の紹介と、実演があり、「グラスを置いて皆さん、一緒に体操をしましょう」との呼びかけに応じて、参加者たちは、リズムに合わせて体を動かし、一時自分の体との対話を楽しんでいた。

祝賀会後半には全員で校歌斉唱とエールがあり、最後に具志堅幸司副学長から、改めて卒業生や関係者の方々へ感謝の気持ちと、新たなスタートへの決意の挨拶で閉会となった。

懐かしい顔に巡り合えた卒業生たちや、先輩や恩師への感謝の言葉や挨拶を交わす人々が名残惜しく会場に留まり、１２５周年という伝統の重さを皆が心に刻んでいた。

日本体育大学は新たな歴史のスタートを切った。

高校スポーツの名指導者が集う！

～第1回　日本体育大学「功労スポーツマスター」表彰～

本学は125周年を期に「功労スポーツマスター」を新設。第1回の表彰が、創立125周年記念式典の中で行われました。日体大の伝統を基盤に、体育・スポーツの振興、人づくりに多大な功績を残された方々のメッセージをご紹介します。

日本体育大学は１２５周年を迎え、これまで８万人もの卒業生を送り出してきました。本学の建学の精神のひとつに、スポーツの指導者を養成するとあります。１２５周年を機に、その精神を今一度見直し、立ち返ってみようと考えました。本学で学んだ学生はみな素晴らしい方々ばかりで、立派な指導者になっている方々が多くいらっしゃいます。そこで卒業生の中から、建学の精神をしっかり胸に刻み、特に顕著な功績を上げた方々に「功労スポーツマスター」の称号を贈り顕彰させていただくことにしました。

今回顕彰する方々は、それぞれの世界で輝かしい実績を修め、その功績は誰もが認めるものです。この方々は、専門とするスポーツのために、あらゆることを犠牲にして、情熱をかけてこられたはずです。その行動はとても尊いものがあります。それは本学で学ぶ後輩である学生はもちろんですが、広く多くの方々に知ってほしいとも思います。私たちは、この方々を顕彰し、その名を刻み永久に讃えるものです。

式典には6名の方が一人も欠席されることなく、集まられたことも非常に嬉しく思います。そして、彼らは皆、スポーツマンシップに則り、奢ることなく高潔性も持たれていることに感動を覚えました。みな口をそろえて「私より立派な方々がいます」とお話になります。この方々にも目標とする先輩がいて、その先輩を乗り越えたからこそ、今日の功績があるのです。

今こうして日本体育大学があるのは、素晴らしい先輩方がいらっしゃったからで、その方々の功績のうえに成り立っているのは間違いありません。偉大なる先輩の存在や功績は、本学の大きな財産でもあります。従って、今後も素晴らしい先輩方を、入学式や卒業式などの式典の際に「功労スポーツマスター」として顕彰していきたいと考えています。

今年の卒業式では「功労スポーツマスター」のお一人である智辯学園和歌山高校野球部監督の高嶋仁先生に祝辞をいただきました。それはとても心を打つお話であり、感動と同時に勇気も与えてくれました。今後、講演会など、直接お話をいただく機会も設けたいと考えています。地域貢献、社会貢献も視野に入れ、学内だけでなく開かれた会にできればとも思います。

これからの日本体育大学には大きな使命があります。ひとつはスポーツを基軸に国際平和に貢献していくことです。本年はリオで、そして２０２０年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。これらの国際大会は平和でなければ行われません。スポーツには国境がありませんし、まさに世界共通の言葉なのです。つまり、スポーツこそ平和の象徴であると思います。

もうひとつは本学は体育大学であり、競技力の向上を目指し、選手を強化することです。もちろん、すべての人がトップアスリートになれるものではありません。しかし、すべての人がスポーツの指導者になることができるのです。仮に試合に出られなくても指導者として花を咲かせることができます。常に生徒や選手のことを考え続ける心、哲学や信念を持った指導者になってほしいと強く望みます。その意味で、今回「功労スポーツマスター」の顕彰は大きな動機付けになるでしょう。言うなれば、全員がこの賞の受賞の可能性を秘めているのです。

スポーツで平和を、そして我が国と全人類に貢献する優秀な指導者の育成と、この使命を果たすために、「功労スポーツマスター」の方々がとても素晴らしいお手本となると確信しています。日本体育大学は、常にパイオニアとなって先頭を走り続けます。大学として日本で初めてスポーツの功労者を顕彰する賞をつくったのもそのプライドの現れです。これからも「功労スポーツマスター」をはじめとした先輩方を誇りに、他の追随を許さない体にまつわる文化と科学の総合大学として邁進していきます。

各氏の生き様、哲学に触れ、それを乗り越える指導者を目指してほしい

学校法人　日本体育大学
松浪　健四郎　理事長

第1回 日本体育大学「功労スポーツマスター」として表彰された方々

渡辺 公二氏

陸上競技・駅伝

1937年福岡県生まれ。昭和35（1960）年体育学科卒業。1970年西脇工業高校陸上部監督に就任。同校の陸上部において高校駅伝8度の優勝を達成した。2013年日体大陸上部コーチに就任、翌14年、箱根駅伝で30年ぶりの総合優勝に導く。

何万人もの卒業生がいるなかで、私が賞をいただくのはとても光栄なことです。日体大は体育専門教育大学なので技術面の指導や競技力などがクローズアップされますが、私はそのことだけでなく、協調性を大切にすること、責任感を持つことなど、人間性の大切さを教わりました。その一方、実技の面では厳しさも学びました。そのおかげで体力はもちろん、忍耐力も付きました。それは私だけでなく、みんなそうした教育を受けて来たので、全国に日体大を卒業した立派な指導者がいるのだと思います。日体大にはこの伝統をこれからも守り、他大学に負けない立派な指導者を育成していくことを強く望みます。

加藤 廣志氏

バスケットボール

1937年秋田県生まれ。昭和35年（1960）体育学科卒業。能代工業高校監督として、1967年に埼玉国体で初出場、初優勝に導き、75年に史上初となる高校三冠を達成。85年にはインターハイ7連覇を成し遂げるなど、能代工高を常勝軍団に育てた。

母校からこのような立派な賞をいただいて本当に身に余る幸せです。私が学生の頃は寮で生活をしていました。そこで、まさに裸の付き合いをし、人間関係の大切さや、学ぶこと、教えることの難しさなど、人として大事なこと、さまざまなことを学びました。卒業後は、強豪校で指導してきた先輩の高校の合宿に同行させていただいたこともありました。そのおかげで私の高校はその後、実績を残すことができました。普通ならライバルでもある他校にノウハウを教えることなどあり得ないのに、その先輩は快く教えてくださいました。そのことをこのたび改めて思い出し、日体大は素晴らしい先輩がいることを誇りに感じています。

山口 良治氏

ラグビー

1943年福井県生まれ。昭和40（1965）年体育学科卒業。75年伏見工業高校ラグビー部監督に。無名のチームだった伏見工高を2度の全国制覇に導き、同校を強豪校に育てた。2013年IRBラグビースピリット賞を受賞した。

賞をいただくことは光栄に思いますし、賞をいただいた私より先輩方の実績の方が素晴らしい方々が多いと思います。私は日体大在学時代、そして卒業後もスポーツを通して数多くのことを経験し学びました。指導者となってからはスポーツを通して多くの子どもたちに誇りを持ってスポーツの素晴らしさを伝えていけることはとても幸せに思います。教師としては教える立場ではありましたが、それ以上に教わることも多くありました。日体大の学生は教師や指導者になる人が多いと思います。自分たちが感じたスポーツの素晴らしさを教え、立派な教育者になってほしいし、これからも多くの指導者を育ててほしいです。

春藤 英徳氏

バレーボール

1942年福岡県生まれ。昭和39（1964）年体育学科卒業。弘前工業高校バレーボール部の監督として1977年に春の高校バレーに出場。1回戦からすべてストレート勝ちで優勝に導く。同年、全国大会三冠を達成。

こんな立派な賞を、皆さんの前で表彰していただき、とても感激しています。学生時代は4年間寮で暮らしました。北海道から沖縄、さらには留学生を含めると海外にまで友達ができたことは財産であり、日体大に来てよかったと心の底から思います。教師になってからも全国に遠征に行くと先輩から差し入れをいただいたり、便宜を図ってくれたりと日体大の先輩方々にご協力いただき本当に感謝しています。日体大生には一生懸命努力することを期待します。実技だけでなく、多いに勉強もしてほしいですね。日体大はどんどん改革が進んでいます。学部も増えますし、その役割が大きくなるはずです。日体大の益々の発展を期待していますし、必ず発展していくと確信しています。

高嶋 仁氏

硬式野球

1946年長崎県生まれ。昭和45（1970）年体育学科卒業。1980年智弁和歌山高校野球部監督就任。94年センバツ、97、2000年の夏と同校を優勝に導く。11年夏には監督60勝を達成、12年夏に戦後初の8年連続甲子園出場を成し遂げる。

母校からこのような賞をいただき、嬉しいと同時にとても驚いています。それもこれも日本体育大学の卒業生の方々の支えがあったからこそです。日体大のよさは数多くあるのですが、卒業するとそれがよく分かります。とにかくOB、同級生など、横のつながりが強いことです。何かあれば助けてくれるし、彼らと協力し合いながら物事を進めていくこともできます。こういう素晴らしい賞が後輩たちの道しるべになればと思います。どんな道を進むにしても、トップを目指してほしいですね。どうせやるなら目標はナンバー1です。その気持ちはどんなに時代や環境が変わっても持ち続けてほしいと思います。

山口 彦則氏

体操競技

1945年大阪府生まれ。昭和42（1967）年体育学科卒業。母校清風高校でロス五輪金メダリスト具志堅幸司、ソウル五輪の池谷幸雄、西川大輔を育てるなど、体操界に新風を吹き込んだ。現在は同校体操競技部顧問。

賞をいただき、あらためて感じるのは日体大の同窓生の素晴らしさです。当時を思い出すと、先輩に助言をいただき、同僚には励まされてきました。深沢の街を仲間たちとトレパン・トレシャツで歩いていた頃を懐かしく思い出しました。日体大はすぐにみんなと仲良くなれるのがいいですね。団結力があるともいえるでしょう。さらに素晴らしい指導者の方々がいることも大きな誇りです。日体大生は多くが教師や指導者になるでしょう。これからも先輩をお手本に、立派な人を育てるという大きな使命感を持って臨んでほしいです。スポーツを通じて人を磨く、向上させる。日体大はそれが実現させてくれる素晴らしい大学だと確信しています。

続けているからこそ、叶う夢、見えてくることがある。もっと上を目指したい。プロになりたいという思いが日体大で確かになった。

SC相模原で選手、ジュニアユースU-14監督として活躍する寺田さん。振り返ると、遠回りして掴んだ夢であるという。怪我の不安を抱えながら、あるいは教員を目指す気持ちに揺れながら日体大へ。そこで頭角を表すことで、プロを目指す気持ちが確固たるものとなった。その後の道のりも決して平坦ではなかった。サッカーは多様な体制のもと、多くのチームがある。働きながら、寸暇を惜しんで練習し、プロを目指す人たちがいる。結果がすべてという厳しいプロの世界で、寺田さんは自分を信じて夢に向かって歩んできた。

活躍する

OB

SC相模原
選手 ジュニアユースU-14監督

寺田 洋介 氏

INTERVIEW

日体大でサッカーを続けたい

高校3年生の時は怪我に苦しみました。痛み止めの注射を打ち、辛い思いをしながらサッカーを続けていました。

そんな時、日体大卒の佐藤輝勝先生（現・日大藤沢サッカー部監督）が着任されました。始めは1年生を中心に指導にあたられていましたが、私たちも指導してほしいと志願したのです。このままでは終わりたくなかったですし、何か惹きつけられるものがあったのでしょう。とにかく先生のおかげで、高校3年生の残りの半年間、サッカーをやりきることができました。

日体大に進学したのも先生の影響です。ただ、先生から「日体大に行け」と言われたわけではありません。先生のような指導者になりたいという純粋な思いからでした。部活を11月まで続け、その後、人生で一番と思えるほど勉強して、2月の一般入試を受けて、日体大に入学しました。

しかし、怪我の不安はずっとつきまといました。サッカー部への入部もためらったほどです。中学生時代のコーチに相談したところ、「先生になりたいと思って日体大に入ったんだったら、サッカー部に籍を置いて友達をつくるだけでも強みになるよ」とアドバイスしてくださり、それで入部を決めました。

入部後しばらくしてから、声をかけていただいてAチームへ。やはり、スピード感や体の強さが違い、慣れるまで時間がかかりました。大学で初めてセンターバックをやるように言われ、先輩の特徴にあわせてどう声をかけていったら良いか、観察したり気をつかったりしながらプレーすることをあらためて考えるようになったと思います。

正直、当時はこんなにも勝てないのかと思い悩んだこともあります。では、どうしたら勝てるのか。徹底的に話し合いながら試行錯誤を続けました。4年生になってからもこのやり方を続け、チームの結束もいっそう強まって、だんだんと勝てるサッカーになっていったと思います。この経験は今でも役立っています。

サッカーを愛する気持ちは変わりませんでしたが、思えば私の選手生活はさまざまな思いに揺れながら過ごしてきたような気がします。ですが、サッカーを続けたい、もっと上を目指したいと、軸をはっきりさせてくれたのが、日体大にかかわる方々との出会いだったのは確かです。

「J」を目指してプロの道へ

就職を控えて、すぐ教員になるよりも、続けられるなら現役でJ（リーグ）を目指して頑張りたいという思いが強くなっていきました。就職活動は

©s.c.sagamihara

まったくしていません。セレクションを受けて、大学4年生の12月に、Y.S.C.C横浜への入団が決まりました。

私が在籍していた当時はJ3リーグはなく、関東リーグに所属する地域のチームとしての活動で、教員として働くメンバーが多く、私も特別支援学校で臨時的任用職員として勤務しながらプレーしていました。夕方5時まで働いて、夜7時から9時まで練習するという毎日です。サッカーという競技は本当に裾野が広く、さまざまな人がさまざまな思いを抱えながらプロを目指していることをあらためて感じます。

続いて、JFL（当時）に所属するAC長野パルセイロに所属できたことはラッキーでした。ここでは、午前中スポンサー企業で仕事をして午後から練習をする生活になり、サッカーでもお金をもらっていたという意味でプロへの第一歩を踏み出したということになります。特に知らない土地でサッカーをすることで、プロとしての厳しさをいっそう意識するようになりました。長野で強化部長を務めていたのが、鈴木政一先生（現・日体大男子サッカー部監督）でした。こうした出会いがあり、プロ生活がスタートしたという点で、長野時代は私にとって大きな転機だったと思います。

その後、FC琉球を経て、現在のSC相模原に移り、今3年目になります。プロ生活は6年目です。サッカーを続けてきたからこそ、多くのことを得ることができたのは間違いありません。

©s.c.sagamihara

寺田 洋介（てらだ ようすけ）／2010年、体育学部卒業。日大藤沢高校出身。日体大卒業後、Y.S.C.C横浜（横浜スポーツ&カルチャークラブ）、AC長野パルセイロ、FC琉球を経て、現在SC相模原に在籍。SC相模原ジュニアユース U-14監督も務める。SC相模原は、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）J3に所属し、ホームタウンである神奈川県相模原市のギオンスタジアムを本拠地に展開。川口能活選手らが所属。そのほか、高原直泰選手など、元日本代表選手とともにプレーできたことが貴重な経験になっているという。

現役だからこそ伝えられること

SC相模原はJ3に所属するトップチームのほか、ユース、ジュニアユース、U-11・U-12トップクラス、ジュニアスクールを擁しています。私は選手としてプレーしJ1・J2を目指すとともに、ジュニアユースU-14監督を務め、さらに小学生のスクールでも指導にあたっています。選手としての練習を日中に行い、夕方は小学生、夜7時半からは中学生を指導しています。

指導で心がけているのは、オンとオフの切り替えです。練習中は厳しく、練習が終われば、例えば元気がなかったら声をかけるなど、子どもたちの気持ちに寄り添って接するようにしています。そういう信頼関係がないと、子どもたちも指導を受け入れてくれません。

そして、現役である以上、選手として良いお手本にならなければいけないという思いが根本にあります。同時に、現役を続けているからこそ、伝えられることがあるはずです。所属したチームでは、元日本代表クラスの選手とプレーさせていただき、そこで感じたことやトッププレーヤーの素晴らしさを説得力をもって伝えることができます。

実は、ジュニアユースの監督は自ら志願して就任しました。高校時代に抱いた夢が、だんだんと形になっていくような実感があります。

目標を実現するお手伝いを

今の目標は、このチームでできるだけ長くプレーを続けることと、自分の指導者としての資質を高めていくことです。

サッカーを教えることはもちろんですが、生活面や勉強面まで含めて、社会で生き抜いていくために、夢や目標に向かって生き生きと取り組んでいけるようなお手伝いをしたいと思っています。

その第一歩として、チームの選手と一緒に小学校や中学校を回って、「夢先生」のようなテーマで講演する活動を提案し、実現しました。私自身、だいぶ遠回りをしてしまいましたが、選手と指導者の両方の夢を実現することができました。ユースやスクールの選手に限らず、多くの子どもたちに接して、サッカーやスポーツの楽しさ、信じた道を進んでいく素晴らしさを伝えていきたいと思います。

その原点は、日体大の授業にあります。具志堅幸司先生や水野増彦先生といった先生方がオムニバス形式で夢の実現や目標設定の考え方についてお話してくださる授業がありました。先生方の人間的な魅力に触れることができたのはもちろん、スポーツの、さらに生き方の本質を学ぶことができました。何が足りないかを考えながらトレーニングする、結果にかかわらず日々努力を続けるという姿勢は日体大で培ったことです。

そのほか、日体大では競技を超えた出会いがあり、多くの刺激を受けました。当時の友人の中にはバレーボールのVリーグをはじめ現役で頑張っている人もいます。そして、何より大切なのはサッカー部の仲間。今でも1月4日と日を決めて年1回は必ず集まり、ミニゲームをしたり、語り合ったりして楽しい時間を過ごしています。

日体大には、目標に向かって邁進するたくましさを持った学生がたくさんいます。仲間を大切に、お互いを高めあって、自分の夢をつかんでください。卒業してからも、どこかで必ず日体大の関係者とつながります。その時に心強い味方になってくれるはずです。

そして、夢をもち自分を信じて歩き続けること。そうすれば必ず道は開けます。

親友が背中を押してくれて、日体大へ。そして、女性警察官に。スポーツの喜び、辛さを知っているからこそ、地域の方々の気持ちがわかる。

水球日本代表男子ポセイドンジャパンのリオ五輪出場が決定し、あらためて水球に注目している人もいるだろう。その水球を通して、さらに日体大での学生生活を通して、友情を育み、女性警察官として活躍するＯＧがいる。小椋さんは警察官になって４年目。市民からの相談業務などに対応し、やりがいを感じているという。部活では辛い挫折も味わったが、親友とともに乗り越えることができた。競技を通したさまざまな経験が、市民に向き合うときの笑顔や元気のもとだ。市民のために、いま任務に全力投球している。

活躍する

OG

鳥取県警察　米子警察署
生活安全課

小椋 佳代子 氏

INTERVIEW

喜びも挫折も親友とともに

私が日体大に入学したのも、いま警察官として仕事をしているのも、二人の友人の存在を抜きにして語ることはできません。

中学から水球を続け、高校は鳥取県内で唯一、水球ができる鳥取中央育英高校に進学しました。高校３年生のときに、全国ＪＯＣジュニアオリンピックカップで３位に入賞。水球で女子が出場できる大きな大会はＪＯＣだけで、そこで結果を残すことができ、自分の中ではやるべきことはやったという気持ちがありました。それまでは初戦敗退が多かったので、大げさに言えば「私たちが歴史を変えたわ！」と舞い上がっていたほどです(笑)。

そして、日体大ＯＢで顧問の宍戸靖雄先生から、体育の教員になって鳥取県の女子の水球の指導者になってほしいと日体大進学を勧められました。教員になることには興味がありましたが、将来の夢がまだはっきりしていたわけでなく、迷っていたことも事実です。

そんなときに、すでに日体大進学が決まっていて、後に親友となる水野(現姓・竹井)成美さんから手紙をもらいました。日体大の水泳部(水球)女子の同期は彼女と私の二人。私が入学しなかったら彼女一人だったわけです。手紙には「一緒にやりたい」と書かれていました。彼女のことは水球がすごく上手い選手として中学生のときから知っていましたし、手紙をもらって率直に嬉しかったです。憧れの人から誘われて日体大への進学を決意。でも、この経緯は彼女には話していません(笑)。

練習が厳しいことはもちろん知っていました。入学したときは、「いよいよ始まるな」と覚悟と後悔が入り混じった気持ちだったのが正直なところです。実際、朝は5時起き。6時から8時頃まで朝練をして、朝食をとって授業へ。夕方からまた練習。そんな繰り返しの毎日です。水球以外のことを考える余裕はありませんでした。

それは、1年生の12月頃だったと思います。私も水野さんも故障していて、別々に異なるメニューで練習していました。思うように競技ができず、周囲の厳しい視線も感じていました。厳しい練習や慣れない生活のストレスがたまり、二人とも精神的にいっぱいいっぱいの状態でした。

練習のため、私は世田谷から健志台へ、彼女は逆に健志台から世田谷へ向かう途中、道でばったり二人が出会いました。彼女は泣きながら歩いていたのです。そのときは励まし合って別れましたが、桜新町の駅で電車を待っていると再び彼女から電話がかかってきました。帰りたいという彼女。でも、彼女が辞めてしまったら、私も一人で続けていける

自信はまったくありません。このとき、最初で最後、二人一緒の〝逃亡〟になりました。

私はそれから、親や高校の恩師、高校のときの水球の仲間といろいろ話をしました。これまで水球を続けてきて、いろいろな人にたくさんお世話になって、応援してくださる人もたくさんいる。期待を裏切ることはできない。そんな思いで、ようやく挫折を乗り越えることができました。後に水野さんは水球女子日本代表として活躍。いまでもLINEで懐かしい写真を送ってくれるかけがえのない親友です。

大学4年生のとき、私は副キャプテンを務め、日本選手権とインカレで優勝。大本洋嗣先生が「小椋、辞めなくて良かったな」と言ってくださったときは涙が出てきました。この瞬間のために4年間があったと、さまざまな思いがこみ上げてきて胸がいっぱいになりました。

頼りにされている実感が嬉しい

鳥取に戻って働きたいという思いがありましたが、学生時代は警察官には漠然とした憧れしかありませんでした。そこで背中を押してくれたのが、短大から体育学科へ一緒に編入学したクラスメートの大鹿（現姓・正野）暢子さんです。絶対に警察官になりたいと言い続け、夢を実現した彼女。その意志の強さはとにかくすごいと思っていました。そんな彼女がどういうわけか「佳代子は警察官に向いている」と言ってくれたことがありました。それなら受かるかどうかは別にして挑戦してみようと、だんだんと真剣に考えるようになったのです。

あまり褒められた話ではありませんが、彼女がいなかったらそんなにキャリアセンター（学生支援センター）にも足を運ばなかったでしょう。情報が豊富ですし、特に私のようにUターン就職を希望する学生には心強い存在でした。

いま、彼女の私を見る目は間違っていなかったと思います。現在は生活安全課に配属。市民の安全相談（例えばDVやストーカーなど女性や子どもに関する事案など）、少年非行の防止、特殊詐欺（いわゆるオレオレ詐欺や架空請求など）を未然に防ぐ活動、サイバー犯罪の取締などを行う部署です。

小椋 佳代子（おぐら かよこ）／2013年、体育学部卒業。鳥取県立鳥取中央育英高校出身。2009年日本体育大学女子短期大学部体育科入学後、体育学部体育学科3年次に編入学。中学1年生から水球を続け、日体大水泳部（水球）で活躍。インタビューでふれた親友たちはもちろん、日体大では全国各地から集まる仲間たちとの交流が楽しみだったとか。卒業後、鳥取警察署、浜村警察署を経て、現在は米子警察署生活安全課勤務。在学中に中学・高校の教員免許も取得しており、将来は少年に関わる業務にも携わってみたいという。

ここで生活安全係として、古物や銃砲などの許認可業務に携わるとともに、市民の方々からのさまざまな相談に対応しています。特に相談業務は、大鹿さんのアドバイス通り、自分に向いているのではないかと思うのです。

採用後、警察学校で半年学び、その後は実習の形で交番勤務と警察学校での教育をしばらくの間繰り返し、一人前の警察官になっていきます。交番勤務は、パトロールや巡回連絡などを行う市民と接する最前線の仕事です。個人宅を訪問する巡回連絡では、「女性警察官が来てくれると気軽に話せて嬉しい」と言っていただくことがあります。4年目の今年から生活安全課に移りましたが、ここでも市民の相談に対応して、「話を聞いてもらっただけですっきりした、ありがとう」と言って帰って行く方がいらっしゃり、非常にやりがいを感じています。いまは仕事を覚えることに精一杯ですが、生活安全課は希望して配属された部署ですし、地域の方々が安心して暮らせるように一つひとつの事案や相談に誠心誠意向き合っていきたいと思います。日体大で出会いやさまざまな経験をしてきたことで、相手の気持ちのわかる対応ができるようになったのではないでしょうか。

女性警察官への期待が高まっていますから、人の役にたつ仕事がしたいと思っている人はぜひ志望してほしいと思います。警察学校は確かに厳しい環境ですが、日体大でスポーツをしている人ならまったく不安はありません。

やはり、日体大卒ということで、期待されたり、一目置かれたりするようなことがあります。礼儀や言葉づかいが身についていること、「私がやります」という積極性は、日体生の強みです。

水球界の躍進に期待

水球日本代表男子ポセイドンジャパンがリオ五輪出場を果たしました。メンバーには、同級生の竹井昂司選手、角野友紀選手をはじめ苦楽を共にした方々が選ばれています。同期のLINEグループで「おめでとう」のやりとりをしました。

水球はやはりマイナーな競技というイメージがあります。五輪に出場することでメディアに取り上げられて、知名度がアップすればとても嬉しいです。そして、水球をやりたいという選手がもっと増えていってほしいと思っています。

今後、国体で水球女子の競技が行われる機会があるという話も聞いています。叶うならば、鳥取で一緒にやってきた仲間を集めて参加してみたいというのが密かな夢です。お世話になった恩返しに、将来ジュニアの指導のお手伝いもできればと思っています。

警察官の仕事は〝守る〟〝助け合う〟というイメージがありますが、私は安全・安心な生活は〝支え合う〟ものではないかと思います。スポーツや仕事を通してそれを学びました。支えてくれた親友たち、信頼してくださる市民の方々に感謝の思いでいっぱいです。

保健医療学部からのメッセージ

今春、救急医療学科では、日本の大学として初めて、ハーバービューメディカルセンター（米・シアトル）での研修を実施。また地域に密着した活動や各地の災害現場で、学生やスタッフが活躍しています。救急指導医として病院前救護の指導に携わる小川教授にその最前線の様子を紹介いただきます。

保健医療学部
救急医療学科
小川理郎 教授

保健医療学部救急医療学科は、一言でいうと救急救命士を育成する学科です。救急救命士養成の機関や学校はいくつかあります。本学科の一番の特徴は、日本で数少ない専門医の上の資格である救急指導医が教育・指導していることです。救急専門医が教えているところは数多くあるでしょうが、指導医が教えている学校はほとんどないのではないでしょうか。それはつまり、とても質の高い教育ができることなのです。指導医はシビアな救急の現場を数多く知っていますし、そこで本当に何が必要か、何をすべきかを経験しています。つまり、実践的な教育ができることも意味します。さらに、救急医療に関するネットワークもあるので、理論はもちろん、リアルな現場での経験を積むことも可能なのです。2016年3月には世界最先端のハーバービューメディカルセンターでの研修も実現しました。救急医療学科はまだ設立して2年ですが、これまでにない本格的な救急救命士育成課程として日本中が注目しているのです。

プロフィール：小川理郎（おがわ　さとお）／奈良県出身。日本医科大学大学院医学研究科（救急医学）修了。医学博士。日本救急医学評議員、日本臨床救急医学会評議員、日本救急医学会指導医／専門医。日本医科大学関連施設で救急医療・災害医療に従事し、東京消防庁消防学校専任講師、救急救命東京研修所教授、日本赤十字社、足利赤十字病院救急救命センター長、日本医科大学救急医学教室を経て、現職。

現場で活躍する活動を教えて！』

Q ハーバービューメディカルセンターとは？

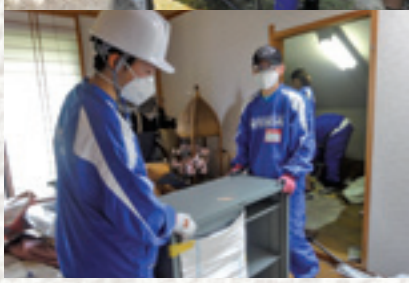
ハーバービューメディカルセンターはワシントン州のシアトル市にあります。シアトルはアメリカの全州の心臓停止からの蘇生率の平均値が10％未満という数値である状況の中、60％という非常に高い数値を示しています。さらに州民の40％がBLS（Basic Life Support／一次救命処置）の講習を受けており、州をあげて蘇生に力を入れています。その中心となっているのが、ハーバービューメディカルセンターです。そのため、ハーバービューメディカルセンターは世界中が注目し、世界中の救急医療に関わる人たちが、一度は研修に訪れたいと夢見ているところなのです。また、シアトル市は、かつてイチローがいたシアトル・マリナーズでよく知られていますが、ボーイング社をはじめ、マイクロソフト、アマゾンなどのIT企業も多く集まるアメリカの成長著しい注目の都市でもあります。さらに治安がよく温暖でとても暮らしやすい美しい都市です。

Q ハーバービューメディカルセンターでの研修内容は？

ハーバービューメディカルセンターは、世界中が注目しているため、研修を受ける人も世界中から集まってきます。ですから、簡単には研修を受けることができません。しかし、あらゆるネットワークを活用して、今回、日本の大学で初めて本格的な研修を受けることができました。本学の学生は、まず病院前救護研修プログラムを受講し、MEDIC ONEについての講習、その後、救急車同乗実習まで行ないました。研修では現実の救急救護を目の当たりにしました。さらに進んで、MEDIC TWOのプログラムも受講しました。これらのプログラム後にはハーバービューメディカルセンターの救急救命士たちとの懇親会があり、シビアな現実、それ以上の意義や使命感などについて救命士の方など、現場を知る人たちと触れ合うこともできました。私たちにとって、非常に貴重な機会でした。今回参加した学生は積極的に関わったこともあり、現地での評判もよく、これから定期的に研修を受けることができるようになりました。日本中の医療に関わる大学がやりたくてもなかなかできないことを実現できたのです。

今回のレクチャーのポイント

- 海外で、地域で、活動や学びの場は多彩に用意されている。
- 救急技術大会などで日頃の学習や実習の成果を試す機会も。
- オール日体大で、人々のいのち・安心・安全を守るやりがい。



～ますます期待が高まる救急救命士を育成～

『海外研修で、災害救急医療学科の

Q 救急医療学科のスタッフ・学生の活動の様子は？

ここ数年間に日本はいくつかの災害に見舞われました。昨今では熊本・大分の地震、平成27年9月には栃木県・茨城県の鬼怒川の決壊などが発生しました。それら災害に際して学生たちを現地に派遣しました。災害時にはボランティアが重要な役割を果たしますが、最前線では訓練されているボランティアが必要となってきます。その点で私たちは救急救命士の訓練をしているので、災害の現場ですぐに仕事ができ、とても歓迎して迎えてくれました。事実、有益な活動ができ、災害現場でお役に立てたと確信しています。災害現場に限らず大きな会場で開催されるイベントをサポートしています。中でも平成27年11月に横浜アリーナで開催された第53回体育研究発表実演会で、心肺停止になられた方に対して、救護班が近くに居合わせたお二人の方と協力し、心肺蘇生法とＡＥＤによる電気ショックなどを行いました。その方は後遺症もなく、完全に社会復帰しています。それは迅速で適切な処置をしたからに他なりません。実は、私たちは事前にＡＥＤの数や位置を把握し、広い会場で万全を期すために会場にもう1台ＡＥＤを持ち込んでいました。それが功を奏し、素早い対応ができたといえます。つまり、現場で何が重要かを知るが故の対応ですね。

災害に対する準備の心構え

災害が起きたらどうなるか、災害イマジネーションをしておくことが重要。その上であらゆる状況を考えて準備をすることが欠かせない。病院や家族など重要な連絡先を確認し、連絡体制を整備すること。また、気温、風雨、降雪などその季節に起こりうるあらゆることを考慮することが望まれる。「想定外」などないと考えて準備したい。

Q 救急技術を競う大会等での学生の評価はいかがでしょう？

救急救命における知識や技術、観察力、さらに判断力をはじめ、処置能力、コミュニケーション力など、事故や災害の現場で必要とされる能力を評価する救急技術大会がいくつか開催されています。そのなかで、平成27年12月に行なわれた「東日本学生救命技術選手権大会」で意識障害傷病者対応で3位、循環不全傷病者対応で同じく3位、総合では7位という成績を収めました。平成28年3月に行なわれた「学生救命技術選手権大会」では見事、優勝を果たしました。これは机上の理論だけでなく、現場での適応力、行動力が確実に身に付いている証だと言えます。ただ、私たちはこれらの大会に優勝するのが目標ではありません。よい成績を収めるのは、よいことですが、それ以上に確かな技術を身につけていることを証明できたことの方がうれしいことですね。

Q 地域貢献や防災への取り組みなどについて教えてください。

キャンパスのある横浜市青葉区と提携を結び、災害地域医療検討会を定期的に開き、災害時に備えています。防災に関する講演会や蘇生訓練なども実施し、日体大も市民の一員として災害に対応するよう準備しています。また、災害時だけなく、日々の生活に関しても保健医療の立場から積極的に関わっていきたいと考えています。横浜市や青葉区などが開催するスポーツイベントに際しても救護班を派遣するなど日々の行事でのサポートも行ない、地域に根付いた大学としての取り組みを推進しています。そして、全国で活躍する日体大の卒業生の存在も大いに期待されます。その卒業生を中心に、全国で日体ＤＭＡＴ（災害時救急派遣救護医療チーム）を組織し、災害のサポートをするような展開も可能でしょう。

災害が起こったときには…

とにかく、慌てないこと。できれば家族などになんらかの方法で連絡をして心を落ち着かせて冷静に対処したい。もし外出先なら10キロをひとつの目安に、歩いて帰るか、待機するか判断すること。水、食料の速やかな確保も重要。そのためにはやはりしっかりした準備が必要だ。そのひとつが枕元に靴を置いておくことも一つに対策になる。

「日体大アスリートサポートシステム（NASS）」は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、「70名の学生及び卒業生をオリンピアン・パラリンピアンとして輩出」すること、さらに将来にわたり世界をリードするトップアスリートを輩出するため、これまでのオール日体大の実績や知見を体系化し構築された。

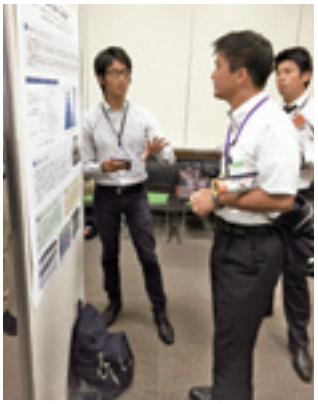
今回取り上げるのは、「医・科学サポート」の1つ「心理サポート」だ。以前よりスポーツ心理学研究室が選手に対して心理サポートを行っていたが、NASSの構想が立ち上がると同時に、スポーツ心理学研究室が中心となり心理サポート研究会が発足し、2014年度からカヌー部に対する支援が始まった。さらに、2015年度にはアーチェリー部、自転車競技部などが加わり、年間延べ45回の講習会（プログラム提供型）を開催した。今年度はスポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格を有する高井秀明体育学科准教授をチーフに教員・大学院生合わせて12名のスタッフが、講習会や個別サポートに携わる。

心理サポートは、自己管理能力の高い選手を育成することを目的として、主に「メンタルトレーニングに関する助言」「技術練習に関する心理的な助言」「社会心理的な側面に関する助言」「心理的コンディショニングに関する助言」「競技に関する心理検査の実施とフィードバック」などの方法によりサポートを展開している。その最前線を取材した。

NASS
Nittaidai Athlete Support System

NASSの挑戦　第2回

自己管理能力の高い選手を育てる
心理 サポート


スポーツメンタルトレーニングフォーラム
第10回記念大会での発表風景

第55回東日本学生選手権大会の視察風景

【プログラム提供型のサポートシステムの流れ】

アーチェリー部合宿に帯同

個々の選手の心理的課題の克服を支援する

練習では力を出せるが、試合になると緊張して良いパフォーマンスを発揮できない。環境が変わるとストレスを感じてしまう。そんな人も多いだろう。

「心理サポート」は、選手が自分自身の内面的な課題に気づき、自己管理能力を高め、パフォーマンスを向上させることを、心理学的立場から専門的にサポートする。認知（例えば、ある状況に対してチャンスと捉えるか、ピンチととらえるか、ある状況をどのように捉えるか受けとるかという状況判断をする上での心の過程）、身体反応、行動、感情は一体となって影響し合っている。勝つ要因が、必ずしも競技力の優劣だけではないことは、多くのアスリートが実感しているに違いない。

個人の課題によってサポートはさまざまだと言う。試合で緊張してしまう場合、結果を過剰に意識してしまうのか、ライバルの影響なのか、環境の問題なのか、認知の偏りや歪みを変えていくような作業をしたり、あるいは腹式呼吸などの緊張を弛緩させる心理的スキルトレーニングを取り入れたり、無意識に体を動かしてしまうような行動を統制したり、その多様なアプローチには気づかされることが多い。

ただ、心理サポートは、選手にこうしなさいと直接的なアドバイスをすることとは性質が違う。選手が自分で気づき、主体的に実践していくことを目指す。それだけに選手一人ひとりとの関わりが極めて重要で、時間がかかる側面はあるが、一度納得すれば、選手にとって大きな財産になることは間違いない。以上の本質的なことを理解した上で、心理サポートの具体的な取り組みを見ていきたい。

心理講習会の開催

個別面談から始まるきめ細かいサポート

NASSの「医・科学サポート」は、「プログラム提供型」と「プロジェクト構築型」に分かれる。心理サポートにおいては、プログラム提供型では講習会やセミナーの開催、プロジェクト構築型では選手に対する個別サポートが主な活動になっている。一対一の個別カウンセリング形式がメインとなるプロジェクト構築型はもちろんのこと、運動部と連携したプログラム提供型においても、個別面談からスタートして部や選手に合わせたきめ細かいサポートを展開していることが他大学にはない特徴であると言う。

では、プログラム提供型からその流れを見ていこう。まず、個別面談で各選手の問題（主訴）の確認、心理講習会の実施に向けた情報収集などを行い、心理スタッフミーティングを経て、講習会やサポートプログラムを立案・実施し、継続的にフィードバックしていく。メンタルトレーニングの概要説明、情動のコントロール（情動プロファイリング、リラクゼーション技法体験）、認知のトレーニング（ポジティブシンキング・イメージトレーニング）、セルフコントロール、目標設定技法やチームビルディングなどが講習会メニューの一例である。選手個人、指導者やチームの意向を尊重しながら、自己管理能力向上を目指していく。

このうちセルフコントロールは、問題を生じさせているのが競技場などの環境の要因なのか個人の要因なのか、変えられるものなのか変えられないものなのか、取捨選択・検討していき、変えられないものに対して自分の立ち位置をどのように築いていくかといった、問題解決に向けた考え方や行動をワーク形式で明らかにしていくような取り組みだ。自ら考えて行動する。繰り返すが、問題の本質的解決のためにはあくまで自己管理が軸である。

一方、プロジェクト構築型の多くは選手から依頼を受けて、サポートが提供される。指導者から紹介される場合、選手が自主的に相談に訪れる場合など、端緒はさまざまだ。その流れは、まずインテーク（最初の面談）で、その選手がどういう問題を抱えているか、生活環境がどうであるかなどの大枠を確認する。その上で、問題（主訴）に応じて適した担当者を心理サポートスタッフ間で選任し、サポートプログラムを立案・実施し、継続的にフィードバックしていく。カンファレンスやスーパーヴァイザーによる振り返りや計画の見直しを行い、質を高める努力も続けられている。

このように、プログラム提供型もプロジェクト構築型もきわめて選手に密着した取り組みであり、個人に係る高度な情報を取り扱うため、選手と同意書や情報開示書、未成年の選手には保護者同意書を取り交わした上でサポートが行われている。選手からメールでスタッフにダイレクトに連絡をとる（申込をする）ことができ、安心して活用してほしいと話す。

NASSの取り組みを外部に向けて発信

NASSの心理サポートの取り組みは、日本スポーツメンタルトレーニングフォーラム第10回記念大会（平成27年8月）において事例報告された。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた日体大の心理サポート体制を全国のスポーツメンタルトレーニング指導士に対して発信できたことは非常に有意義である。

学内においては、他のサポート分野や学生相談委員会との連携体制の構築、心理サポートを依頼するクラブの増加、個別サポートの依頼の増加など、一定の成果を感じていると言う。一方、これまで紹介してきたように個別的で時間のかかる活動であり、スタッフの数はまだまだ十分とは言えない。質を維持しつつ、どうやって幅広くサポートを提供していくか、スタッフは試行錯誤を続けている。

NASSの取り組みの中で、心理サポートはどちらかと言えば目立たない存在かもしれないが、国際競技力を高める上で、今後きわめて重要なものになるだろうと、取材を通して感じた。自己管理能力を高めること、自己の中で問題解決できる人材を育成することは、選手、競技においてはもちろんのこと、社会的スキルの養成としてすべての場面で汎用性の高い取り組みである。スポーツ心理について多くの選手にいっそう関心を持ってもらいたい。そして、問題解決に真摯に取り組もうと考える者は、ぜひとも心理サポートの門をたたいてほしいと思う。

新たな知・技・心との出会い

平成28年度
新採用教員紹介

「毎日たとえ1％でも着実に進歩すること」、「日々是精進」
「熱き心を持て」、「一生勉強、一生青春」、「我以外皆師」
「やらずに後悔することなかれ！迷った時はチャレンジ！」
今回紹介する新任教員の先生方が座右の銘としている言葉です。
これを見ても、熱い思いと日体生に対する期待が伝わってきます。
スポーツを知り尽くしたOBの先生、さまざまな領域で豊富な知見をお持ちの先生が仲間に加わりました。
本学の新たな時代を迎え、学部構成・教育内容の多様化、最先端の教育・研究の推進に、いっそう取り組んでいきます。
教職員・学生が一つになって、スポーツの新しい可能性を広げていきましょう。

プロフィール注　①出身地　②主な担当科目　③主な学歴・職歴　④学位

日体生の活動性の高さに期待

金本　良通（かねもと よしみち）／体育研究所 教授

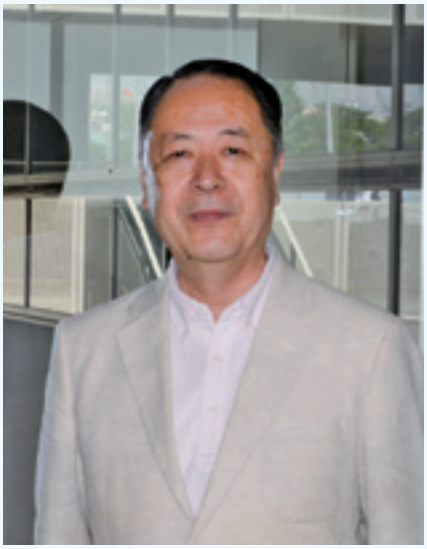
研究テーマ：算数・数学科での言語とコミュニケーションに関する研究やカリキュラム研究、特に数学的表現力やコミュニケーション能力の育成についての授業のあり方や教育課程に焦点を当てています。

学生時代の思い出：算数数学教育関係の大学内外のサークルや全国規模の学会・研究会などによく出かけていました。他の大学での催しなどにも出かけ、交流していました。大学の中とともに外との交流は大切だと思っています。

日体生へひと言：”座学”で満足しない学生を育てたいものだと思っています。特に教員養成では、学校の現場や教育の実情を知りつつ、研究として蓄積されたものを十分に理解しながら、からだ全体で教育活動に取り組むような資質能力が重要だと思っています。その意味で、日体生の活動性の高さに期待したいです。

こんな人（趣味）：美術館や博物館によく行きます。日本画が好きで、絵巻物が物語として楽しめるようにしたいです。

①大阪府 ②算数科教育関係 ③大阪教育大学教育学部数学科卒業／大阪教育大学大学院教育学研究科数学教育専攻修了／鹿児島短期大学助手・講師・助教授／福島大学教育学部助教授／埼玉大学教育学部助教授・教授／東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科教授 ④博士(教育学)（広島大学）



大学時代には豊かな体験をしてほしい

府川　源一郎（ふかわ げんいちろう）／体育研究所　教授

研究テーマ：国語科教育及び日本近代児童文学。とりわけ、国語科の教科書を核にした歴史研究、カリキュラムや実践論の研究を行っています。所属は日本読書学会、日本文学協会、日本国語教育学会、全国大学国語教育学会、横浜国立大学国語日本語教育学会、日本児童文学学会、日本教育学会、国語教育史学会ほか。『明治初等国語教科書と子ども読み物の研究―リテラシー形成メディアの教育文化史』(2014年2月刊・ひつじ書房)に対して第38回日本児童文学学会特別賞を受賞。最近では、『「ごんぎつね」から「良寛」まで―「童心」のゆくえ』と題して、新美南吉顕彰会（半田市新美南吉記念館）で講演しました。

学生時代の思い出：のほほんと過ごしていました。

日体生へひと言：日本体育大学は多くの文化にアクセスするのにはきわめて便利な位置にあります。大学時代にはできるだけ様々な所にでかけ豊かな体験をしてほしいと思います。

こんな人（趣味）：観劇や旅行など。

①東京都 ③横浜国立大学教育学研究科修了／川崎市公立小学校教諭／横浜国立大学付属鎌倉小学校教諭／横浜国立大学教授・東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科教授（併任）④博士（教育学）（東京学芸大学）

生命力、勢い、突破力。日体生は頼もしい

岡田　隆（おかだ たかし）／体育学部 体育学科 准教授

研究テーマ：「体幹」＜体幹の競技特性、腰痛、体幹筋力トレーニング＞、「ボディビル」＜筋肥大、筋の形状変化（ボディメイク）、戦略的栄養摂取、減量（除脂肪）、水分調整＞について研究しています。

学生時代の思い出：柔道部に所属。膝前十字靭帯を断裂して手術を受けたことで怪我に対して興味を持ち、またリハビリ期間に体を鍛え込むうちに、トレーニングとその適応（体の変化）について興味を持ちました。そして怪我やトレーニングの勉強に目覚めました。

日体生へひと言：日体生からは生命力、勢い、突破力を感じます！社会を元気にしてくれる頼もしい存在です。すごい筋肉を持った学生もたくさんいます。どんどん鍛えて日本のフィジカルの凄さを日体大から世の中に知らしめましょう！「トレーニングが好き」ならバーベルクラブ（設立中）へぜひ入部を。

こんな人（趣味）：ボディビルダーです。夏は黒くなって頬がこけますが、病気ではなく仕上げているのです。

①東京都 ②テーピング理論（実習含む）③日本体育大学体育学部武道学科卒業／日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了／東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得後退学／了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科准教授／ JOC 科学サポート部門員／日本ボディビル・フィットネス連盟選手強化委員 ④修士（体育科学）（日本体育大学）

自分の力を信じて未来を切り開け

舘鼻　誠（たてはな まこと）／教養・教職科 准教授

研究テーマ：フィールド調査が大好きで、瀬戸内海地域を中心に戦国社会の解明に取り組んでいます。最近は、戦争と若者をテーマに日体卒業生からの聞き取り調査や、京都の旧家に伝わる弓術資料を使用して堂射に関する研究もはじめています。日本史研究会、戦国史研究会、織豊期研究会などに所属。著書は、『戦国争乱を生きる－大名・村・そして女たち』(日本放送出版協会)など。

学生時代の思い出：物心ついた時からの鉄道ファン。中１の時からカメラ２台を銀箱に入れ、蒸気機関車を追い求めて全国各地を一人で放浪。家出少年に間違えられたこともありましたが、このとき経験は、いまも大切な宝物です。高校時代は講道館にも通い、柔道初段。

日体生へひと言：自分の力を信じて未来を切り開け。失敗を恐れるな。君たちには若さという武器がある。何度でもやり直せる時間がある。そしていつか夢をかたちにしよう。

こんな人（趣味）：幼い頃からカメラ好き。いつでも、どこでもカメラが相棒。撮影写真は雑誌・ポスターにも使用されています。 最近は弓道会の監督として、部員たちを激写中。

①東京都 ②歴史学／スポーツ研究（ゼミ）③立教大学文学部史学科卒業／立教大学院文学研究科博士前期課程修了／立教大学院文学研究科博士後期課程単位取得後退学／立教大学・専修大学・文京学院大学講師、LEC 大学教授 ④修士（文学）（立教大学）

笑顔と挨拶で素敵な学生生活を

南部　さおり（なんぶ さおり）／体育学部 社会体育学科 准教授

研究テーマ：「児童虐待；児童のけがの見分け方、虐待の徴候、原因、子どもの身体的・心理的影響、予防法など」、「学校スポーツ事故；体罰・いじめ・ハラスメントなどの原因や予防方法、補償の問題など」について研究しています。

学生時代の思い出：大学時代には、スポーツよりもアルバイトに励んでいました。大学院修士の時代には、仲間と酒を呑んで熱い議論を交わすという日々だったと記憶しています。大学院博士の時代には、司法解剖の補助と馴れない医学の勉強で、かなり苦労しました。

日体生へひと言：日体大に来て一番感動しているのは、皆大きな声で挨拶ができることです。挨拶は、他者との間の垣根を一気に取っ払ってくれる素晴らしいアイテムです。しかも無料（笑）。これからも是非、笑顔と挨拶で素敵な学生生活を送って下さい。世界にはばたけ、日体大生！

こんな人（趣味）：ドライブ、ツーリング（中型バイク）、クルージング（1級船舶免許保持）、船釣り

①高知県 ②スポーツ危機管理学 ③神奈川大学法学部法律学科卒業／明治大学大学院法学研究科修了／横浜市立大学大学院医学研究科修了／横浜市立大学医学部医学科助手／横浜市立大学医学部医学科助教 ④博士（医学）（横浜市立大学）

失敗を恐れず、チャレンジを！

東野　裕子（ひがしの ゆうこ）／児童スポーツ教育学部　児童スポーツ教育学科 准教授

研究テーマ：英語教育が専門です。小学校における有効な活動を「プロジェクト型外国語活動・英語教育」とし、課題解決型活動の考案やその効果や意欲との関連などについて研究しています。

学生時代の思い出：学業、クラブ、見聞を広めることを３つの柱として忙しい日々を送りました。「自ら学ぶことの大切さ・おもしろさを知ったこと」「クラブで培った人間関係」「様々な体験をしたこと」がその後、社会人になったときに大きく役立ちました。

日体生へひと言：大学時代は、とても輝かしい時間だと思います。生涯、付き合うことになる信頼し合える友達に出会えたり、自ら学ぶことの楽しさを知ったり、自分の将来について真剣に考え、準備をしたり…。自分が決めたこと、やってみたいと思うことは失敗を恐れず、チャレンジして充実した時間を過ごしてください。

こんな人（趣味）：国内、国外を問わず、いろいろなところに行って、その土地の人に出会い、風土や文化に触れることを楽しんでいます。

①兵庫県 ②基礎ゼミナールⅠ ③京都女子大学文学部教育学科卒業／兵庫教育大学大学院修士課程学校教育研究科教科・領域教育専攻修了／兵庫県西宮市公立小学校教諭・主幹教諭／兵庫県 尼崎市公立小学校・教頭 ④修士（教育学）（兵庫教育大学）

スポーツの素晴らしさを伝えられる人に

日比野　幹生（ひびの みきお）／体育学部 社会体育学科 准教授

研究テーマ：専門は、スポーツ政策学です。スポーツの現代的政策課題を中心に分析・検討、批判、政策提言などを理論的かつ実践的に研究することを目指しています。また個別政策としては、競技スポーツ政策、アンチ・ドーピング政策などを研究テーマとしています。

学生時代の思い出：学生時代は、日体大で素晴らしい友人に恵まれ楽しい４年間を過ごしました。日体大での学友は、今でも本音を語り合える一生の友になっています。

日体生へひと言：スポーツ基本法の制定、スポーツ庁の設置、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催と、今、世界のスポーツ界は日本に注目しています。日本のスポーツ界が劇的に変わろうとしているこの時期に思いっきりスポーツを感じて・考えてみてほしいと思います。そして、スポーツの素晴らしさを多くの人々に伝えられる人間になってほしいと考えています。

こんな人（趣味）：休日は、愛犬のパピオンと多くの時間を過ごしています。

①神奈川県 ②スポーツ行政 ③日本体育大学体育学部体育学科卒業／早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士前期課程修了／文部省体育局競技スポーツ課／文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課、スポーツ庁競技スポーツ課 ④修士（スポーツ科学）（早稲田大学）

人の憂いがわかる人に

松平　昭二（まつだいら しょうじ）／教養・教職科 准教授

研究テーマ：「生涯スポーツを目指した新たな部活動の在り方」をテーマに、生徒が望む自分に合った運動を選択できる部活動の設立と、そこでの取組を通した自主的な活動が、その後の生徒の体力向上や運動への関心・意欲に及ぼす影響について分析・検討しています。

学生時代の思い出：友達と安アパートに集まり、皆と将来の夢について語り合うことが楽しみでした。テレビゲームや電話もない時代、貧しくても豊かな心は育まれた気がします。

日体生へひと言：勝手にメールを送っておきながら、都合が悪いのかもしれないという配慮もできない人間になってしまっていませんか。自然に接し、学業やスポーツを楽しみ、他の立場に立ってものを考えられる人としての日々を送る。国際社会の中で尊敬される社会をつくるには、この一見平凡と見える生活をきちんと送ることが大切なのです。

こんな人（趣味）：趣味は料理。お袋の味の再現に熱中。今後は料理教室に通い、さらに腕を磨く予定です。

①富山県 ②体育科教育法／体育科教育実践法 ③日本体育大学体育学部健康学科卒業／日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了／世田谷区立希望丘中学校長／シカゴ日本人学校長／世田谷区立東深沢中学校長 ④修士（体育学）（日本体育大学）

恵まれた環境で充実した学生生活を

山﨑　博和（やまざき ひろかず）／体育学部 体育学科 准教授

研究テーマ：トランポリン運動における技術習得過程の解明及び技術習得速度と競技センスとの関連についての研究を進め、練習効率の向上や障害予防に繋げていきたいと考えています。

学生時代の思い出：学生時代は、クラスや寮生活での多種多様なクラブ・サークルに所属する仲間との出会いの中で有意義な学生生活を送っていました。トランポリン競技部の部員としては、世界選手権に出場することもでき、国際大会ではメダルを獲得することができました。

日体生へひと言：限られた学生生活の中において、多くの仲間をつくり、たくさんの事を学び、探求心・好奇心をもっていろいろなことにチャレンジできるのが “いま” ではないでしょうか。毎日が充実していると実感できる手ごたえのある日々を送り続けてほしいと思います。そして日体大には、その充実した学生生活が送れるだけの環境があると思います。

こんな人（趣味）：スキー、ジムでのフィットネス

①東京都 ②専門運動方法（トランポリン）／専攻実技研究 ③日本体育大学体育学部体育学科卒業／株式会社アルペン／日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了／日本体育大学運動方法トランポリン研究室助手／武蔵野音楽大学専任講師 ④修士（体育学）（日本体育大学）

5年後、10年後を見据えてほしい

菊池　直樹（きくち なおき）／体育学部 体育学科 助教

研究テーマ：トレーニングによる身体応答の多様性や遺伝特性とスポーツパフォーマンスに関する研究に携わっています。

学生時代の思い出：日体大では、空手道部に所属していました。第一学生寮にいたので期間中は朝早くからエッサッサの練習もしました。入学時は、トレーナーになりたいと考えて日体大を選びましたが、ゼミの活動を通して研究に興味を持ち研究の道に進みました。

日体生へひと言：今から社会に出て活躍をしていく5年後、10年後を見据えてほしいと思います。スポーツ科学は、新しい学問でどんどん情報がアップデートされていきます。必要な情報を見極めて、新たなことに臆せずチャレンジして欲しいです。日体大の教員として、先輩としてみなさんの活躍の手助けをさせていただきます。

こんな人（趣味）：キャンプや登山、スキー、ゴルフなどのアウトドアスポーツです。

①長野県 ②トレーニング実践演習 ③日本体育大学体育学部体育学科卒業／日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了／日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了／日本体育大学研究員 ④博士（体育科学）（日本体育大学）

勉強、部活動、仲間作りを全力で

田中　理恵（たなか りえ）／児童スポーツ教育学部 児童スポーツ教育学科 助教

研究テーマ:体操、歴史、芸術性、採点方法、美しさ、暴力、教育をキーワードに、器械体操を専門とし、指導の現場で生かせる研究に取り組んでいます。

学生時代の思い出：日本体育大学では授業と体操競技の練習の日々を送り、オリンピック出場を目指していました。2012年ロンドンオリンピックには日本代表として出場しました。

日体生へひと言：日本体育大学にはオリンピックを間近に経験された先生や、現役オリンピック選手、日本を代表する選手がいます。ほかに類を見ない環境での大学生活は、勉強することや刺激になることがたくさんあると思います。勉強に部活動に仲間作りに全力で学生生活を謳歌して下さい。私の座右の銘は「練習は裏切らない」です。いま皆さんが取り組んでいることはいつか必ず実を結びますので、ひたむきに努力を続けてほしいと思います。

こんな人（趣味）：愛犬と一緒にいる時間が癒されます。

①和歌山県 ③日本体育大学体育学部体育学科卒業／日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻博士前期課程修了 ④修士（体育科学）（日本体育大学）

平成27年度卒業記念と体操競技アベック優勝を祝し植樹式を挙行いたしました

平成28年4月4日(月)、横浜・健志台キャンパスにおきまして、記念植樹式が挙行されました。これは、平成27年度卒業生より平和のシンボルとしてオリーブの木が寄贈され、また同時に第69回全日本体操競技団体選手権大会で男女アベック優勝も祝し合同で植樹式を開催したものです。植樹式には、体操競技部の神本雄也（体育学科４年）、白井健三（体育学科２年）や笹田夏美（体育学科３年）、村上茉愛（体育学科２年）が参加し、またリオ五輪レスリング内定の樋口黎（男子フリー57キロ級）と太田忍（男子グレコローマン59キロ級）もお祝いに駆けつけました。この前を通る日体生が、卒業生の熱い思いと体操競技部の偉大な記録を感じることで、良い刺激を受けてくれることを祈っています。

平成28年度入学式を挙行いたしました

平成28年4月3日（日）、東京・世田谷キャンパスにて、平成28年度入学式を挙行いたしました。

体育学部 1,361名（体育学科 818名、健康学科 197名、武道学科 147名、社会体育学科 196名、編入学 3名）、児童スポーツ教育学部 204名(児童スポーツ教育学科 児童スポーツ教育コース154名、幼児教育保育コース50名)、保健医療学部183名(整復医療学科99名、救急医療学科84名)、大学院体育科学研究科46名（博士後期課程11名、博士前期課程42名）が本学への入学の許可を受けました。

柔道 阿部一二三が全日本選抜柔道体重別選手権優勝

平成28年4月3日(日)、福岡県・福岡国際センターにて開催されました全日本選抜柔道体重別選手権大会において、新入生の柔道部・阿部一二三(武道学科1年)が男子66kg級で優勝いたしました。リオデジャネイロ五輪の最終選考会も兼ねていて惜しくも代表には選出されませんでしたが、初優勝となりました。成28年4月4日(月)、柔道部田辺勝部長と共に、松浪健四郎理事長、谷釜了正学長に結果報告を行ないました。

モンゴル文化教育大学との交流協定を締結しました

モンゴル文化教育大学と日本体育大学において学術・スポーツ交流を行うことを目的とした「学術・スポーツ交流調印式」が4月6日、東京・世田谷キャンパスにて行われました。日本体育大学からは松浪健四郎理事長、今村裕常務理事、谷釜了正学長をはじめとした関係者13名、モンゴル文化教育大学からはトムルオチル学長、牧原創一理事長、富川力道名誉教授にご出席いただきました。この協定はスポーツ科学、体育にかかる双方の専門的知識・技術の共有、教育的な研究、授業、用務を通じた専門性の高揚および協同の促進、友好拡大および国際理解を到達目標とする学生・教員の異文化交流の支援を目的としています。

本学の「地方自治体への体育・スポーツ振興支援」が日本ギフト大賞2016地域ハーモニー賞受賞

平成28年4月28日（木）に日本プレスセンターにて、日本ギフト大賞2016表彰式が開催されました。

本学からは谷釜了正学長が出席し、田中理恵助教が選考委員を務めました。

第2回目となる「日本ギフト大賞2016」の選考にあたっては「ニッポンのギフト」を年間のテーマとし、アクセントをつけることでギフト文化を様々な視点から活性化するために設定されました。本学は地域のスポーツ活動に卒業生を指導者として派遣するなど、スポーツの振興に寄与する活動に対して地域ハーモニー賞を受賞しました。また、都道府県賞のプレゼンターとして田中理恵助教が各都道府県受賞者へ表彰いたしました。

JICA短期ボランティア合同帰国報告会を開催しました

平成28年5月13日(金)17:30～東京・世田谷キャンパス記念講堂にてJICA短期ボランティア合同帰国報告会を開催しました。谷釜了正学長はじめ、独立行政法人国際協力機構（以下JICA）から12名の職員の方々、また本学と同じく野球分野でJICAと大学連携を行っている5大学（兵庫県立大学、桜美林大学、北九州市立大学、福岡大学、近畿大学）の関係者の方々にもご参列いただきました。約500名の学生、教職員が見守るなか、各国での活動報告や現地で感じた様々な感情、想いを発表しました。参加した学生たちは仲間の貴重な体験談を聞き、世界に目を向けるきっかけとなりました。

本学では今後も短期ボランティアの参加者を定期的に募集します。また、長期ボランティア希望の学生に対してもサポートをしますので、興味のある方は是非国際交流センターへ足を運んでみてください！

野球部 首都大学野球春季リーグ戦 優勝

5月23日（日）サーティーフォー相模原球場におきまして、「日体大ＶＳ筑波大」による優勝決定戦が行われました。

今季の春季リーグ戦は大混戦となり、首都大学野球連盟では2003年以来となる優勝決定戦となりましたが、日体大が4対3で見事に勝利し、6季ぶり22回目の優勝を決めました。これで、日体大は6月5日から行われる全日本大学野球選手権に出場いたします。球場には多くの在学生やＯＢが応援に駆け付けており、優勝した時の恒例となっているエッサッサも見事に披露されていました。

スキー部 青野令が理事長、学長報告を行いました

平成28年5月24日（火）本学学生の青野令（体育学部4年）が松浪健四郎理事長、谷釜了正学長に今シーズンFISスノーボード・ワールドカップ【ハーフパイプ種目】男子総合優勝の報告を行いました。

FIS(国際スキー連盟)より送られたクリスタルグローブ(クリスタルトロフィー)は年間3つしか獲得のできないトロフィーで、今年度は3つ中2つが日本体育大学の青野選手、髙梨選手が獲得いたしました。その他にも優勝メダルのお披露目もありました。

JICAボランティア平成28年度第一次隊派遣前訓練修了式に松浪健四郎理事長ほか本学関係者が出席致しました

平成28年6月15日（水）、ＪＩＣＡボランティア平成28年度第一次隊派遣前訓練修了式が長野県駒ケ根市にある独立行政法人 国際協力機構 駒ケ根青年海外協力隊訓練所において実施されました。

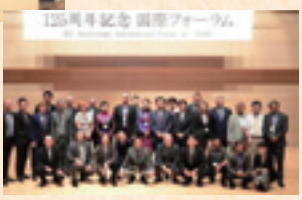
平成28年度第一次隊として各国に派遣される約70日間に渡る訓練を終えた新隊員155名（男性71名、女性84名）、他ＪＩＣＡ関係者、来賓、新隊員の家族等が参加し盛大に行われました。来賓として招待された本法人松浪健四郎理事長より新隊員の方々へ「教える事よりも、学ぶ事の方が多い」など、自身の経験に基づく激励ならびに祝辞が送られました。

式典終了後、本学出身者である新隊員の矢内翔洋さん（キルギス・体育）、與那原祥さん、遠藤泰雅さん（ソロモン・体育）、平野圭一朗さん（ジャマイカ・体育）、幾田貴洋さん（モルディブ・体育）、土屋圭悟さん（パヌアツ・サッカー）、森心さん（スリランカ・ラグビー）を囲み、松浪健四郎理事長他本学関係者より激励、記念撮影がなされました。

125周年記念国際フォーラムを開催しました

平成28年6月20日（月）東京・世田谷キャンパス　記念講堂で本学初となる国際フォーラムが開催されました。

本学と交流協定を結んでいる15大学のうち、8大学の学長等にご参加いただき、各大学のプレゼンテーションが行われました。フォーラム終了後はNレストランにて懇親会が行われ、設置校の留学生や学生、協定校の先生方と食事をしながら交流を図っている姿が見受けられました。参加した学生は各大学の生の声を聞き、海外や交換留学に興味を持った学生も多いのではないでしょうか。

参加校：（協定校）モンゴル国立体育大学、国立パラツキー大学、上海体育学院、リンネ大学、ウズベキスタン体育大学、国立体育大学（台湾）、リトアニア体育大学、スタフォードシャー大学　全8大学

（併設校）日本体育大学荏原高等学校、日本体育大学柏高等学校